

《門出（東路の道の果て・あこがれ）①

都から東国へ行く道の果て（である常陸〔ひたち〕よりも
東路の道の果てよりも、

もっと奥の方（の上総国〔かずさの〕で成長した人（私）は、
なほ奥つ方に生ひ出でたる人、

（今から思うと）どんなにか田舎びて見苦しかったであろうに
いかばかりかはあやしかりけむを、

どうして（そんなことを）思い始めたのか、
いかに思ひ始めけることにか、

世の中に物語というものがあるそうだがそれを、
世の中に物語といふもののあるなるを、

どうかして見たいものだと思い続けて、
いかで見ばやと思ひつつ、

《門出（東路の道の果て・あこがれ）②

することもない退屈な昼間や、夜遅くまで起きている時などに
つれづれなる昼間、宵居(よひゐ)などに、

姉や、継母などといった（大人の）人々が
姉、継母などやうの人々の、

その物語（どうか）、あの物語（はどうか）、光源氏の生涯（はどうか）など
その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、

ところどころ話すのを聞いていると
ところどころ語るを聞くに、

ますます（物語に）心惹かれる気持ちが募るのだけれども、私の望む通りに
いとどゆかしさませれど、わが思ふままに、

どうして（姉や継母などが物語の一部始終を）そらんじて語ってくれくれようか。
そらにいかでかおぼえ語らむ。 →語ってはくれない。

《門出（東路の道の果て・あこがれ）③

ひどくじれったいので、自分の背丈と同じ大きさに薬師仏を作って（もらい）
いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、

手を洗い清めなどして、人のいない時にこっそりと（仏間）に入っては
手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、

「（どうか私を）早く京に上らせてくださって、
「京に疾（と）く上げ給ひて、

たくさんあると聞いております物語を、あるだけ全てお見せくださいませ。」と
物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」と、

身を投げ出して（一生懸命に）額を床につけて、お祈り申し上げているうちに、
身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、

十三になる歳、（父の人氣が満ちて）上京しようということで、
十三になる年、上らむとて、

九月三日に門出をして、いまたちという所に移った。

九月（ながつき）三日門出して、いまたちといふ所に移る。

《門出（東路の道の果て・あこがれ）④

長年の間遊びなじんできた家を、
年ごろ遊び慣れつる所を、

（旅立ちの準備のために）

外からまる見えになるほどに、（調度類を）取り払い散らかして、大騒ぎをして
あらはにこほち散らして、たち騒ぎて、

夕日が沈む頃で、たいそうもの寂しく一面に霧が立ち込めている時に
日の入り際の、いとすごく霧り渡りたるに、

車に乗ろうとして、（わが家の方に）ふと目をやったところ、
車に乗るとてうち見やりたれば、

人のいない時に何度もお参りしては、額を床につけて礼拝した薬師仏が立っていらっしゃるのを
人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ち給へるを、

お見捨て申し上げる（残したまま去る）のが、悲しくて、人知れず泣けてきてしまった。
見捨て奉る悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。